

お慈悲

大慈悲

「如来は無蓋の大悲をもって、三界を矜哀す。」

これは大無量寿経のお言葉である。如来の大慈悲には蓋がない。蓋のあるものは限りがあり底がある。如来は無限の大悲のものであって、蓋と底がない。

如来は無蓋の大悲をもって三界を矜哀す。三界とは、欲界、色界、無色界のこと。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間の五道と、天上界の第六他化自在天までを欲界と言われ、色界は、その上にあつて形や色の善美を極めたところであり、無色界は、形の無い霊なる世界でただ言語に絶した幸福のみがある世界だと言われる。

しかるに如来の大悲の涙は、苦そのものである欲界の最悪処、地底のどん底から、幸福そのものである天上界の無色界にまでかけられている。それだから三界を矜哀すと言われるのであり、無蓋の大悲と言われるのである。

しかるに凡夫は、涙して同情し、慈悲に似た心をおこすようでも、それは人生に痛み苦しんでいる人へのみである。もし幸福に暮している人を見れば、(1)それに対して無関心であるか、(2)喜んであげるか、(3)あるいはそれに対して羨望の心を起すか、(4)嫉妬するかである。いずれも、大悲をもって三界を矜哀する仏の心とは本質的に異っている。

我見

小さい城、やどかりのような自分相応な小さい殻、何という小さい我見であることよ。我慢で造った、貪欲で造った小さい殻、小主観に閉じこもつて、善だ悪だ、苦だ楽だ、損だ得だと言いつつ、結局は限りなく、苦しみへ、冥へと墮ちてゆく。ものゝ本質にふれないで。道も光もほんとうには見得ないで。

小さい殻に入っている限り、自分の本当の相はわからない。この世の本当の相も見えては来ない。

小さい城に閉じこもっている限り、如来の大慈悲はわからない。

邪見、憍慢等は皆、小さい主観に立てこもっている心の相ではないか。

「大憍慢の妄情をもては、まことにいかでか、仏智無上の他力を受持せんや。」(覚如上人)

自力邪見の小さい城を出でない限り、三界を矜哀したもう如来の大慈悲はわからない。

衆生はおどる

一切は、如来の大慈悲の光懐においてある。一度まともに久遠の眞実を仰いだ時、無蓋の大悲の前に照らし出されるものは何であろう。

罪悪深重 邪見憍慢悪衆生

どうしようもない罪悪深重、煩惱熾盛の生死界ではないか。

しかるに衆生は、この現実人生の正体に、まともに打ち当ることを恐れ、嫌っている。人生の正体を知ることが恐れ嫌う者は、自己の正体を見ることをも嫌う。

罪悪深重にして、それを知らず、それを見ず、しかも世に跳ることは、これこそまことに恐るべきである。悲しむべきである。

大慈悲を領解しない限り、ついに自己と人生との実相を知らないであろう。自己と人生の正体を知らない限り、大慈悲を領解することは出来ない。

人は大部分、自己と如来を領解しないで、外に／＼と跳る。

小さき殻を出るとは

小さい殻を出でること、小さい城を壊すこと、それより外に救われる道はない。小さい殻を出づるとは、誰にも彼にも愛嬌をふりまわすことでもなければ、誰とも彼とも妥協することでもなければ、何宗でも同じことで同じ高嶺の月を見るのだと言った、選択のない寛容さでもない。多人数にもてはやされることではもちろんない。

自己を知ることによつて、自己の主観を超え、罪悪深重に直面し、業苦に直面して、静かにそれを超え、大慈悲に徹することである。まことに広大なる大慈悲が骨髓に徹して下さることなくしては、小主観を超えることは出来ない。したがって業苦の無底の深淵に当面することは出来ない。

大慈悲は必ず、人を内面に誘導して、久遠の病根を見せしめ、その自覚を通して、大慈悲を領解せしめて、救いを成就する。

偽り

実に大慈悲こそは、三界を平等に矜哀する無蓋の真心である。しかも暗へ／＼と、衆生の業苦の火炎裏に神通応化して、至らぬ所なき光である。

衆生の独覚、虚偽賢善の仮面を透過して、直ちにその無明流転の核心をつき、自ら衆生無限の暗に徹して、衆生の業苦を、御身御自身の業苦と感じたものである。

されば、小さき殻に立てこもつて、無蓋の大慈悲の領解を拒む者は、同時に自己の正体を知ることが拒む者であり、自己の正体を知らぬが故に、念々の生活は偽り多きものとなる。

かくて自己を偽る者は如来を偽る。自己を偽つて、虚偽賢善の仮面をかぶるもの、即ち独覚ではないか。独覚は、自己の真相を知らず、生死海を知らない。

剛直

何と言う醜い鬭争あらそいであることよ。喧嘩であることよ。「あゝ言つた、こゝろ言つた」と、百万言費しても、そこに何もかも生れては来ない。汚い名利心の戦い、自ら傷つき、人を傷けて、血みどろな相、相手がやめるまではやりつける。それで喧嘩のひる時があると思うか。そうした我慢で剛直した相が、そのまゝ死の敗北ではないか。何と言う根強い我慢であることよ。たとえ勝つたとて、そこに何が残ると思うのか。

小さい殻に立てこもつた者の哀れ無価値なる剛直よ。

救い

静かに大悲の親心を憶念する時、我等は今現に生きているこのまゝが、大悲の胸中にあつて、み胸を大悲せしめる全体であることを知る。久遠の業苦、宿業の流れが、鉛の如く重く流れている。

しかるに如来は大悲のみ胸を開いて、痛々しき業苦の裏に、限りなく救済のみ手をさしのべて、衆生が意おもわざるに先だつて意い、求めざるに先だつて与えんとし、願わざるに先だつて願ひ、限りなく本願をひらいて、撰取したもうてあるではないか。

衆生の笑いは浅薄である。衆生の喜びは得手勝手である。衆生の悲しみも涙も自墮落である。氣まぐれである。

しかるに、如来の真心の前に、こうした笑みや涙がそのままであり得ようか。一心の真心の前にどうして襟を正さないでいられようか。一切は如来の真実大悲の前においてのみその正体を暴露する。宿業、罪悪深重、微塵もゴマ化することを許されず、「出離の縁なき」我を知るとき、大悲を憶念することより外に何が許されるであろうか。小さき殻に閉じこもつて、小細工することが、どうして許されようぞ。

大悲を憶念すること、そのみが衆生に許されたすべてである。嗚呼！我にして大悲を憶念するを除けば、一切は小さき城の中でのゴマ化しに過ぎないのであつた。

大慈悲のみ我が生命にてまします。

我は久遠の宿業を負うて大悲を憶念する。しかるに如来を憶念するその全体が、大悲に憶念せられている全体であつた。宿業の上にこそ、大悲の憶念があつた。本願の誓いがあつた。大悲の憶念によつて救われてゆく念仏の境の尊くも厳肅なることよ。